西洋中世美術からの再解釈―古代ローマの遺産、ユダヤ、イスラーム

加藤磨珠枝

西洋美術史において、古代から中世にいたる「一千年紀のユーラシア」は、やっかいな問題をはらんでいる。なぜなら「中世」という時代概念が、そもそもイタリア・ルネサンスの人文主義者の価値観によって形成され、古代ギリシャ・ローマの異教世界から、中世キリスト教世界への発展という、ヨーロッパ中心主義を前提として論じられてきたために、その文脈では語りえない広域な世界を対象とするからである。

その一方で、ユーラシア大陸をまたいだ美術工芸品やそれを飾る図像表現、高価な素材や職人たちの移動に関する研究は、西洋中世美術史のなかで長い伝統を持ち、純粋なテキストに基づく歴史記述に代わって、他者を相互に結びつける「中世世界」の概念の再構築に大きな役割を果たしてきた。

本講ではキリスト教美術を一つの軸におきながらも、それを相対化しつつ、当時のユーラシアについて再考を試みる。こうした手法は、21 世紀以降、特に歴史学を中心に活発な議論がなされている「グローバルヒストリー」（対象とする時間と空間が広範で、ヨーロッパの位置づけを相対化しつつ、諸地域間の相互連関や比較をもとに新たなテーマを論じる手法）の美術史版ともいえるものである。近年欧米では、関連研究の出版も相次いでいるため、その紹介という側面もある。

紀元 1 世紀に、パレスチナ地方のユダヤ人共同体の中から誕生したキリスト教は、次第にローマ帝国内に根づき、313 年にはコンスタンティヌス帝により帝国内で公認され、392 年にテオドシウス帝によって国教と定められた。これによって、その他すべての伝統的な異教神殿は閉鎖されたために衰退し、オリエント起源の密儀宗教も消え去った。キリスト教美術は、私的な環境から公的なものへと発展していったが、その造形表現には古代ローマの皇帝美術や世俗美術、異教の神々のイメージ、占星術や魔術の図像など、さまざまな影響が見てとれる。

一方、3 世紀から 7 世紀半ばまで、ローマ帝国、ビザンティン帝国と国境を接し対峙し続けたササン朝は、ゾロアスター教を国教としたが、多様な信仰と文化を容認し、西洋中世美術の形成にも影響を及ぼした。この帝国の衰退とともにゾロアスター教も覇権を失い、それに代わって 7 世紀にアラビア半島で新たに勃興したイスラームが勢力を拡大することになる。

要するに、紀元一千年紀とは、古代世界の宗教構成に大きな変化が生じた時代であり、現代まで生き続ける「世界宗教」のなかで仏教を除いたものが誕生し、その視覚表現も大きな変貌を遂げた時代であった。こうした理解に基づいて、当時のユーラシアにおける東西交流の諸相を西洋美術の視点から見ると、いくつかの重要な要素や時期が挙げられる。

本講では主に以下のテーマをとりあげる。（1）まず、西洋美術がユーラシアに拡大

した契機として、アレクサンドロス大王（前 336-前 323）の東方遠征とその伝承の意義について、（２）中世美術の重要な文化基盤となった古代ローマの遺産、（３）キリスト教の母体となったユダヤ人社会の発展とその美術、（４）ユダヤ教、キリスト教と同じく一神教に属し、7 世紀以降、版図を拡大していったイスラームの美術とキリスト教美術の関係。

以上の考察を通じて、従来のキリスト教を中心とする西洋中世美術史観の課題について考え、グローバルな議論に一石を投じたい。